

『妻は、くノ一』

IMAGICA ウェスト、NHK 時代劇で 4K トータルワークフローを提供 撮影～編集～カラーグレーディング～CG/VFX～納品をワンストップ・サービスで



「妻は、くノ一」

NHK 総合で放送中のドラマ『妻は、くノ一』（全 8 話／毎週木曜日 20:00～）。IMAGICA ウェストは同作品において、4K RAW 収録による撮影、オフライン編集、CG/VFX、グレーディング、オンライン編集、納品に至るトータルワークフローをワンストップで提供した。

同社では、「時代劇・忍者もの」でアクションシーンやナイトシーンが多く、CG もふんだんに使用するが、連続ドラマなので納期的な余裕がない」という相談を受けたことから、撮影から編集、CG/VFX、カラーグレーディングも含めた当社の“ワンストップ・サービス”を提案。カメラマン等との打ち合わせを経て、ナイトシーンなどに強い [RED EPIC] による 4K RAW 収録で撮影した後、グレーディングルームの DaVinci Resolve で RAW データをダイレクトに読み込み、カラー調整することで暗部の中にも深い階調を表現していくワークフローを選択した。

また、CG やクロマキー合成を多用する必要があったことから、イメージサービス部デジタルイメージンググループも加わり、撮影部、編集部、CG プロデューサー、デザイナーから営業部、スケジューラーなども含む、全社横断型のチームを編成。通常のラインとは異なる指揮系統でプロジェクトが進められた。なお、IMAGICA ウェストがドラマなど長尺作品の 4K トータルワークフローを手掛けるのは今作が初めて。

撮影現場の最重点テーマ＝正確・確実なデータ収録

NHK の時代劇『妻は、くノ一』の制作では、IMAGICA ウェストが松竹撮影所内に有する「京都編集室」とは別に、同プロジェクト専用の通称“くノ一部屋”を設置。撮影の翌朝にはデジタル現像済みの映像を仮編集に渡す必要があったため“くノ一部屋”に RED ROCKET を持ち込み、撮影直後に KiPro に収録したデータから仮編集用の Rush QT（フル HD データ）を作成した。

撮影、デジタル現像、オフライン編集を京都で、オフライン編集後のデータ(AAF データ)と大元の 4K データ(R3D データ)を用いたカラーグレーディング作業 (DaVinci Resolve) と CG/VFX 合成を大阪・本社でそれぞれ実施した後、全素材を集約して、松竹撮影所内に設置した「京都編集室」の Smoke でタイトルやエンドロール、劇中の注釈などのテキスト挿入や本編集、フォーマット化などの仕上げ作業を行い、納品した。なお、“くノ一部屋”では、試写や CG チェックも行われたという。

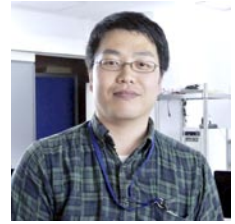
今回、RAW データ収録のため、現場でのチューニングはせず、



撮影風景

その場にある画・色・光の情報を全て収めることを目的に、データが正確に記録されているかが最も重要となった。RED EPIC 本体の SSD への 4K 収録と同時に、KiPro でのバックアップおよびチェック用に 2TB × 3 台の HDD で三重のバックアップ体制を敷いたという。

カラーグレーディングは、AAF と R3D の取り込みに半日、カメラマン立ち会いのグレーディングに 1 日、その後 DPX 化してテープ収録に半日と、1 話あたり 2 日間を費やしている。増田好宏氏（イメージサービス部 フィルムプロセスグループ カラーリスト）は、〈ドラマのような素材容量が大きな RAW データを、デジタル現像しつつグレーディングする作業は初めて。いろいろなノウハウを蓄積できました〉と話す。なお、音効と整音は松竹が担当した。



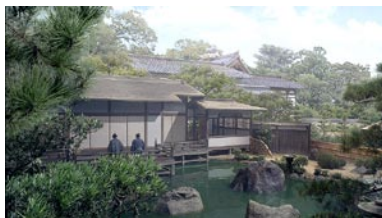
増田好宏氏

クレーンを使用した江戸の街の再現 CG = 全て手でマスク切り

現場責任者を務めた佐々木宏氏（イメージサービス部 デジタルイメージンググループ課長 CG プロデューサー/VFX スーパーバイザー）は、CG/VFX におけるポイントについて〈4K 12bit のデータをデジタル現像したものを DPX 10bit に変換してから加工するため、8bit と比べて若干重くなりますが、基本的には通常の作業と変わりません。最終的なオンエアは



佐々木宏氏



CG 合成された江戸の街（上）とメインセット（下）

10bit ではありませんが、CG/VFX シーンも他の実写カット同様、グレーディング出来るように 16bit レンダリングを行い、10bit に変換後に作業を行っています。そのほか、4K で作成し、ズームアップなどに使用しているケースも一部あります〉とする。

また、CG/VFX 作業において一番時間をかけた約 20 メートルのクレーンを手動で操作し、松竹のオープンセットを江戸の街に変えたカットに関し、〈左右・降下など複雑な動きをするクレーンに合わせ、エキストラを奥と手前用にそれぞれ撮影し、後でミックスしながら、背景の全てのマスクを手動で切り、CG の背景を合成しました。いわば“クレーンマットペイント”のような感じですね〉と続ける。

今後の“オール 4K ワークフロー”に自信と確信

〈デジタル現像して後処理で作り込む 4K RAW 収録のスタイルは、普段、映画を制作している方々にはスナリと理解できるワークフローではないかと思いますが〉というのは撮影現場で DIT の役割を果たした小林哲也氏（撮影部 撮影技術）。

加えて、佐々木氏は〈各種カメラのフォーマットやセンサーサイズ、レンズ、画角など、関連する知識は頭に入れておく必要があります。現状、ドラマ、映画、CM などジャンルにかかわらずスケジュールはタイトになっていますが、納期に間に合わせるのももちろんのこと、予算に見合ったクオリティ管理が求められます。『妻は、くノ一』を通じて様々な課題も見えました〉とする。



小林哲也氏

今回、ワークフロー全体を統括した徳本武氏（営業部 第一営業グループリーダー/テクニカルコー

ディネーター)は、〈社内外のスタッフの足並みを揃えることに苦労しましたが、長尺かつスケジュールがタイトな仕事を“オール 4K”で実現できたことは良い経験になりました。全ての部署が締切に追われながらの作業でしたが、最終的に良いものに仕上げる事が出来たと思っています。スタッフにとっても 4K 制作への自信と確信を得ることができたのでは。やがて訪れる「4K 制作は当たり前」の時代に向けて、今回のワークフローを実現できた意義は大きい〉と語る。



徳本武氏

◇ NHK 『妻は、くノ一』 <http://www.nhk.or.jp/jidaigeki/kunoichi/>

.....

『妻は、くノ一』

プロデューサー：永井準哉、中嶋等／監督：山下智彦、服部大二／撮影：江原祥二、南野保彦／照明：土野宏志、林利夫／美術：原田哲男、佐藤絵梨子／助監督：服部大二、前原康貴／編集：園井弘一、関谷憲治／録音：中路豊隆、河合博幸／撮影技術：小林哲也／CG・VFX・VTR 編集：IMAGICA ウェスト／原作：風野真知雄 (『妻は、くノ一』角川文庫)